

スポーツリハビリテーションへの心理学的アプローチ
～エリクソンの心理・社会的発達課題に着目して～
藤本雄太（スポーツ学研究科 競技スポーツ系 スポーツ情報戦略分野）

主査：豊田則成（指導教員） 副査：佃文子，高橋佳三

Psychological approach to sports rehabilitation
: Focusing on Ericsson's psychosocial developmental tasks
Yuta Fujimoto

キーワード：スポーツリハビリテーション，トレーナー依存，支援

Key word : sports rehabilitation, Trainer dependent, support

【はじめに】

先行研究では，アスリートが受傷することにより，依存対象の喪失に発展する可能性を指摘されており(上向・竹之内,1997)，さらに，鈴木・中込（2013）は，受傷アスリートは学生トレーナーに対してソーシャルサポート希求度が一貫して高かったことを報告している．すなわち，競技から離脱した受傷アスリートは，対人関係の欲求が高まり，身近な存在のトレーナーとの関わりを求めることで，トレーナーに対して過度な依存へと発展する可能性があると考えられる．そこでは，受傷アスリートがトレーナー主導のリハビリテーションに過度に依存し，主体的に取り組むことができないことから，少なからず競技復帰へ向けての取り組みに影響を及ぼすことも考えられる．しかし，トレーナーのソーシャルサポートがリハビリテーションアドヒアランス（積極的にリハビリテーションに取り組む姿勢）に対して有効に機能し得るとの報告もある（鈴木・中込，2013）．このことから，受傷アスリートは，受傷後にトレーナーに対して一旦依存せざるを得ないことも充分想定され，そこから自立的な取り組みを取り戻していくことこそが，受傷を通じて精神的な成長を遂げていくためには不可避であると考えられる．

また，佃(2010)はトレーナー自身に十分な自立が見られなければ，競技者の自立行動を促進する言動は期待できないとも述べている．つまり，受傷アスリートがトレーナー依存から自立していく過程は，受傷アスリートのみで成り立つ過程ではなく，受傷アスリートとトレーナーの関わりがあるからこそ成り立つ過程だとも捉えられる．そのようなことから，受傷アスリートとトレーナーにインタビューを行い，双方の視点から質的にアプローチを行うことが必要だと考えられる．

【本研究の概要】

上記のことを踏まえ，本研究では研究Ⅰ，研究Ⅱから成り，2部構成となっている．研究Ⅰでは「受傷アスリートはトレーナーからどのように自立していくのか」というrq1を設定し，研究Ⅱでは「トレーナーはどのように支援の質を変容していくのか」というrq2を設定した．

そこで，本研究では，rq1，rq2を踏まえた上で最終到達点として「スポーツリハビリテーション現場において受傷アスリートとトレーナーはどのように発達課題を解決していくのか」というRQを設定し，発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした．

【研究Ⅰ】

・方法

- 1) **対象者**：スポーツ傷害により競技から長期離脱を強いられた受傷アスリート4名（男性1名，女性3名）．
- 2) **調査期間**：20XX年4月～20XX+1年2月
- 3) **データ収集方法**：調査対象者に対して，集中的で，継続的な半構造化インタビューを1対1で複数回実施した（1回約60分，2週間に1回の頻度）．そこでは，予め調査内容について説明をし，承諾を得てから会話の内容をICレコーダーに収録した．その後，発話内容を逐語化して分析データとして扱った．
- 4) **分析方法**：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下,2012）を用いて分析を行った．

・結果と考察

分析の結果から「受傷アスリートはトレーナーからどのように自立していくのか」というrq.1に対し，受傷アスリートは「受傷後，トレーナーに縋ることで，判断基準を委ね，

自分を見失う。すると、思い通りにうまくいけなくなり、自己の現状を内省することにより、判断基準を再考し、自己を管理していく」という仮説的知見を導き出した。

【研究Ⅱ】

・方法

- 1) 対象者：トレーナー（アスレティックトレーナーの資格所有者）4名（男性2名、女性2名）。
- 2) 調査期間：20XX年2月～20XX年9月
- 3) データ収集方法：調査対象者に対して、集中的で、継続的な半構造化インタビューを1対1で複数回実施した（1回約60分、3週間に1回の頻度）。そこでは、予め調査内容について説明をし、承諾を得てから会話の内容をICレコーダーに収録した。また、2020年3月ごろから新型コロナウイルスの影響により、これまで対面で行われていた1対1でのインタビューを避けなければならなかったため、Zoomなどのビデオ通話を利用してインタビューを行った。その後、発話内容を逐語化して分析データとして扱った。
- 4) 分析方法：複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model）を用いて分析を行った。

・結果と考察

分析の結果から「トレーナーはどのように支援の質を変容していくのか」というrq.2に対し、トレーナーは「受傷後の受傷アスリートを窮地から救おうと思い、安心感を提供していく。その後、受傷アスリートを復帰へ導こう思うことで、プロトコルを基にした客観的な評価に縋り指導をしていくが、受傷アスリー

トとの関わり方を見失い、思うように指導がうまくいけなくなる。しかし、一度立ち止まり、誰のための指導か自己に問うことで、これまでの指導を振り返ることにより、受傷アスリート目線で現状を捉え、意思疎通を取るようになる。すると、受傷アスリートのことを深く理解できるようになり、安心して見守ることができるようになる。」という仮説的知見を導き出した。

【総合考察】

本研究では、研究Ⅰ、研究Ⅱで得られた仮説に、E.H.エリクソン（Erikson, 1950, 1963）の発達論を導入し、まとめていく。エリクソンが提唱した発達段階は「心理社会的発達理論」と呼ばれており、人間の一生を8つの段階にわけ、その段階ごとに心理的課題と危機、課題達成により獲得する要素などを分類したものである。

以下に、本研究で得られた仮説的知見にエリクソンの心理社会的発達理論を導入した図式を示す（Fig.1）。

ここでは、「スポーツリハビリテーション現場において受傷アスリートとトレーナーはどのように発達課題を解決していくのか」というRQに対して「受傷アスリートは受傷を体験することによって、これまで未解決であった乳児期から青年期に起こりうる発達課題と向き直し、再び解決を試みる。一方で、トレーナーは受傷アスリートへの関わりを通じて、自身の親密性や世代性といった発達課題と向き合い、解決を試みているといえるのかもしれない」ということが導き出された。

RQ：スポーツリハビリテーション現場において受傷アスリートとトレーナーはどのように発達課題を解決していくのか

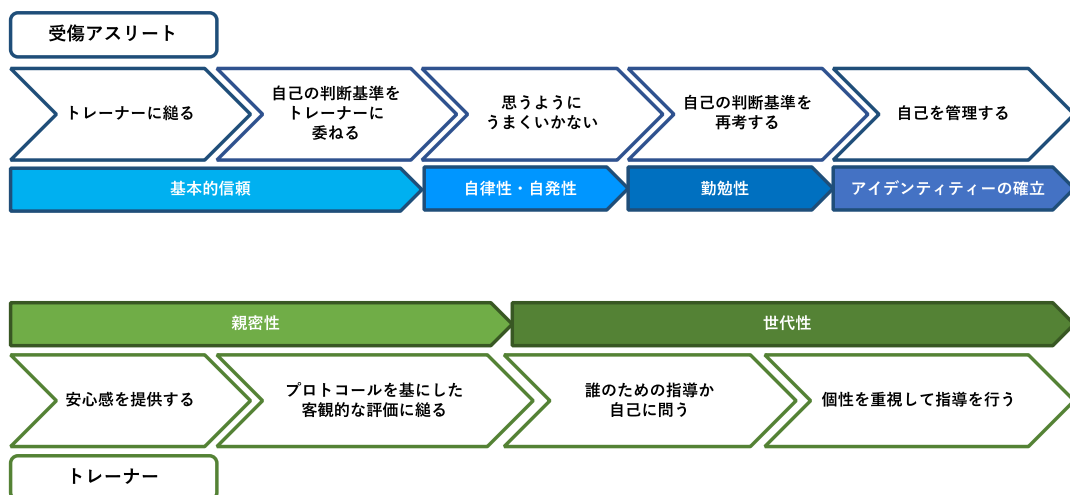


Fig.1 スポーツリハビリテーションを通して受傷アスリートとトレーナーが共に発達課題を解決していくプロセス